

親鸞における「即得往生」

岩 本 泰 波

「即得往生」が親鸞における「信心」の核心であり、「生」の根源的な内容の開示であることはいうまでもない。

「往生」という文字はその意味の原意に直接して捉えられらるるなら「生」は生死に引転される「受動」の生きざまであることを離れて「能動的積極的」なものとなることであろう。「往生」における「往」の意味は本来的にはそこにあるはずである。しかし、「往生」という言葉は「対境」としての浄土、この世の外なる「彼岸」へ「往き生れる」こととして、古来しばしば二世界説的に理解され、願求されてきた。

「往生」がもし、そのような「対境」として存在する、「彼岸」への目的的なかわりであるとするなら、その能動性は喪われ「流転」における生と同じく「対象」へのかかわりとなってしまうのである。「生」がそのように「対象」への志向的な動であるとき、そこでの「動」は「対象」を媒体とし「それ」に依存することによって「受動」あるいは「被動」の性格をもつことは免れえない。少くとも、そのような

「動」が「純粹能動」であることは許されない。そこでは「生」が「往」であることによって積極的能動的であるべき「往生」の真意は喪失されざるをえないのである。

そこで、問題はこの「往生」という言葉がかかわる「浄土」のもつ内容である。その意味をみるためには、われわれはどうしても何故に人間のながい歴史のうちに「浄土往生」という思想・信仰が生じたかという根源の問いに立返らねばならないと思う。おそらく、そのような思想・信仰を生みだした人間の情慮の内奥にあるものは、人と人との「関係」の紊れへの嫌厭であり、纏れ絡んではてしない苦惱への足掻きの底にあらわれる「純粹清浄な関係」への憧憬なのである。その証言をわれわれは『観無量寿経』にみる事ができる。

さて、「浄土」がそのような人の世の汚濁を逆照する「純粹清浄な交わり」であるとするなら、それは決して「対境」として存在する、実体ではなく、どこまでも「交わり」であり

「関係」であり「はたらき」であらねばならない。その「はたらき」が放つ交流でなければならぬ。それゆえ「往生」とは「対境」への動向ではなく、このような「淨しい交り」へと「招かれ」方向づけられる「生のありかた」であろう。そのような「在りかた」としてのみ「生」ははじめて「対象」に引転されることのない真に純粹な「能動」として言葉の全き意味での「往」生であることが可能となる。

しかし、そのような「淨しい交わり」がすでに何処かに実在する既成の「場」への動向として志向されるなら「淨土」は再び「対境」となり、流転を生む「対象」となり、「往生」は「それ」への欲望的なかかわりとなる。つまり、「交り」が「はたらき」でなく淨土が「場」として「そこ」が欲向される限り「生」における「動」は「純粹」であり「能動」であることを喪うのである。

それゆえに親鸞は「淨土への願生」つまり、「純粹な関係に生きんとすること」が、人間の志向をもつてしては到底、およびもつかないことがらであることを、とくに『教行信証』の「三心釈」において克明にいいあらわした。ひとはつねに「対象」への著相によって「淨しさ」を煩惱の泥土に塗らしめ、はてしなき流転のうちにある。このような「現実」を「知」「情」「意」の極限にまで分析開明し

此の虚仮、雜毒を以て無量光明土に生ぜん欲す、此れ必ず不可

なり

と現実の様態を「如来の心」の「真実・清淨」とのかかわりの中で逆照するのである。

「無量光明土」とは淨しい交わりが放つかぎりない知慧であり、分別知の関与を無限に否定する「交わり」の純粹さである。その至純な交わりを構成することのできるような力を人間の意志は具えていない。

それゆえに親鸞は、そのような「淨土」に方向づけられる生のあり方、つまり「欲生」という生が、「如来の招喚」によつてのみ可能となりうることを明らかにした。ここには「生」について人間が「こちら側から」構想する一切の觀念を払拭し、逆転するものがある。「往生」という「生」が「純粹能動」である可能根拠はここにあるのである。

かくて、「淨土」への「往生」が穢濁の生を貫ぬいて、衆生に生起することは「生」がひとえに「如来の招喚」への「純粹呼応」であることによつてのみ可能となる。このような「生」のあり方を親鸞は「即得往生」といいあらわしているのである。

さて、その「即得」における「即」について親鸞は『教行信証』の「行巻」に

即の言は、願力を聞くに由つて報土の真因決定する時剋の極促を光闡せるなり

といいあらわす。それは「信巻」によれば

信楽開発の時魁の極促

であり、また「即」はしばしば

ときをへず、日おもへだてぬなり

といいあらわされている。とすると、親鸞における「即」という「とき」は「今この瞬間」といわれるような「現在」をその内容とするものようである。

しかし、「即得」という「とき」はそのような一種の「知的直観」ともみられる「瞬間」としての「現在」、あるいは「永遠の今」というような「時」の直証的把握とは異なるのである。それは「即得」が「信楽開発の一念」という「信心」の内容であるからである。そこには「無量寿・無量光」への極限の号告としての「南無」を生起せしめる生々しい具體的な現実がある。

親鸞において衆生の生ははてしなく深い罪業の深淵にある度し難き浮沈である。それゆえ「往生」という「如来の招喚」への「純粹呼応」は容易に可能とはならない。もしそれが、こちら側から求められる限り、「如来」との遭遇は永劫にありえないのである。それゆえに「招喚」は「如来の招喚」であり「勅命」であることよってのみ、可能となる「とき」の飛躍的成就である。「即得」を「純粹呼応」といいあらわし、「往生」を「純粹能動」と語らんとする核心は

親鸞における「即得往生」(岩 本)

ここにある。

それゆえ「呼応」においても「能動」においてもこれを「純粹」ならしめるものは、ひたすら「如来の招喚」の「力動」である。今、このような生のあり方を、みずからの目には絶対に「みえない生の動態」といいあらわすことができるのではないかと思う。たとえば、体内に動いてやまぬ血流は、「自らの目にはみえない」。「みえない」とは血の流動が「からだ」を遊離せず、まさに「即得」という動態であるからである。それは刻々の動であり、動いてやまぬ「即得」である。「血流」は確かに自らの体内の「動」である。しかし、その「動」は「私の意志」による「自力の動」ではなく、「動」を「動」たらしめる「他力」である。にもかかわらず、この「動」は決して「受動」ではない。「私の意志」にまったく依存しない流動であることよってそれは「能動」であり「純粹能動」であるといわねばならない。その「動」の由って来たる「根源」こそ、生をして生たらしめる「大いなる力」である。この力こそ「自然」と語られ、「願力自然」と仰がれてきたのではなからうか。

親鸞は「自然」を「報土」といいあらわしている。「浄土」を「はたらき」として語らんとしたこの論稿の微意の根柢はここにある。それゆえ、ここでみようとす「自然」は決して「自然」ではない。

さて、このような「はたらき」に「招喚」される「動」が「純粹呼応」であり、「即得」といわれる「生」の「動態」、つまり「往生」であるとすると、「即得往生」が「対境」としての「浄土」をめざしての倫理的生——万善諸行の自力作善——として捉えられる生の形式ではないことはすでに明らかであるところであろう。

かくて、「即得」としての「往生」は「対境」を絶して生きる「横超断四流」の「動時」である。それゆえに「即得」はつねに「初発」としての「刻々の動」である。「時剋の極促」が「信樂開発の一念」であり「廣大難思の慶心」といわれるゆえんはそこにある。この「能動時」としての「即得」が「時剋の極促」であればこそ「信樂開発の一念」が「たすけんとおぼしめしたちける本願」に純粹呼応する「念仏まふさんとおもひたつころのおこるとき」という「歡喜」として「生」を「開発」することができるのである。

この「開発」としての「能動時」は決して単に流れ行く時間の「発端」ではない。それは「時」の「起点」が身のうちに内在するような「自力の発起」としての「とき」ではない。刻々が「初発」であり「開発」である「能動時」としての「一念」は、それゆえにこそやむことなき「如来の招喚」への「純粹呼応」であり、一切の自己意識による発動への意志を無化しつつ、自ら衆生の体内に起動しつづける。「急

作、急修して頭燃を炙うが如くす」る「一切凡小」の「一切時」の発動の意志を刻々に無化し、まさに、その「時」のただ中において

一念一刹那も清浄ならざるなく、真心ならざるな

き「清浄の真心」「無碍廣大の浄心」「利他真実の欲生心」を「廻施する」「大悲心の成就」。この「はたらき」が「往生」という「動時」を生み、生みつづけるのである。

「往生」という「動時」は「如来の願力によって生みつづけられる刻々のとき」である。それゆえ、「如来の招喚」は「不可思議兆載永劫」の「菩薩行」の衆生心中における「起動」であり「はたらき」であり、その「持続」である。

この「永劫の如来の菩薩行」が「刻々の能動」として、衆生心中に起動しつづけるとき「往生行」は「永遠の動」すなわち「無上大涅槃に至るべき身」に「決定」される。親鸞は「生」が「浄土」へと方向づけられた刻々の現在の生態となることを「大乘正定聚の数に入るなり」といいあらわした。

それは「大般涅槃のさとりにいたるべき身となる」「とき」、すなわち、対他の無限活動の光輝がわれわれの生を「往生」という生態として無限なる動時たらしめる根源力への遭遇の「とき」である。

「必至滅度」という「往生時」の重要な内容がここに開顕されるのである。「必至滅度」とは上来所述の「如来の招

喚」の由って起る「根源」の開示である。「必至滅度」とは決して、穢濁に喘ぐ現実の生を「未来の完全性」へ方向づけることよって生をして努力の歩みとすることではない。逆に對他活動の無限性の根拠としての光寿二無量の「招喚」が「往生人」の「体」に、すでに已に塵点久遠劫来起動して止まないこの大悲こそ「必至滅度」の「願」なのである。それゆえに親鸞は

然れば、弥陀如来は如より来生して報応化種々の身を示現したもう（証卷）

と「必至滅度の願」が「往生人」に具現する「現実態」を闡明にいいあらわしている。「如」とは「真如」であり、「一如」であり、「無上涅槃」であり「無為法身」である。「いろもなし、かたちもまします」（唯信鈔文意）という「法性法身」である「如より来生」する「種々の身」とは、それゆえにすでに述べた「往生」という「純粹能動」の「みえない生」の由って来たる「根源」の開示である。「往生決定」とは、「生」がこの「根源」の「はたらき」に撰められることである。それは自らの意志の力による行為の到底、およびもつかない「生」の「能動」が「みえない生」に開顯する動態であり、その確実性である。

かくて「往生決定」とはまさしく「如来の招喚」への「純粹呼応」である。「呼応」とは「身」に全現して、絶対に自

意識とならない「行態」である。そのような「生」の「かたち」こそ、「即得」の「生」であり、「即得往生」が「必至滅度の願」の具現であるゆえんである。それゆえ親鸞は「真仏土巻」に「往生」を

皆受自然虚無之身無極之体

と「無量寿経」によって言いあらわすのである。

「即得往生」とは、かくて「如よりの来生」としての「生」であり、「根源」の「動」への「純粹呼応」の「生態」である。「未来」とは「時」の予想ではなくこの「動」の「根源性」であり、逆説のようではあるか「身」のうちに已にはたらいてやまぬ「起動」の無限性をいいあらわそうとする言葉なのである。

それゆえに「往生」という「能動の生」を絶対に「目にみえない動時」と表現することができるのではないかと思われるのである。

（国際商科大学教授・文博）